

国語科における探究的な学びを作る授業研究

～『ごんぎつね』の学習をととして～

川端 大奨

本学級の子どもたちには、自分から本に手を伸ばして読もうとする姿が、なかなか見られないという課題があった。そこで、本研究では、4年生の物語教材を使い、子どもたちが、物語の面白さを実感して読書に向かう姿を育てたいと考えた。

心情曲線を活用した授業に取り組んだ。心情曲線を用いることで、子どもたちは、自分の意見と友達の意見のずれを見つけやすくなり、思考を深めることができたと考えている。しかし課題として、学習を深めるための手立てが不足していたことで、学級としての話し合いが深まりにくかったことが挙げられる。心情曲線は話し合いのきっかけになることはできたが、そこから深めるための手立てがなく、途中で停滞する場面が見られた。

キーワード：心情曲線、ごんぎつね、心情と行動のずれ、カリキュラム・デザイン、劇

1. 研究の目的

本研究は、子どもたちが物語の面白さを実感し、その後の読書生活につなげたいと考えて実践した。

普段本学級の子どもたちには、自分から本に手を伸ばして読もうとする姿が、なかなか見られないという課題があった。読書の面白さを実感できずに、読書から遠ざかっているのではないだろうか。

そこで、本研究では、4年生の物語教材を使い、子どもたちが、物語の面白さを実感して読書に向かう姿を目指した。

本研究における「探究力」とは、「物語の内容と物語の構造をとらえることで、物語の面白さに気づき主体的に読書に親しむ力」とする。さらに、個々の読みを表現し合い、それらを共有することで自分と友達の読みのずれに気づき、物語を読み返す中で自身の読み（内容や構造の理解）を修正・改善する「省察性」が働くことで、より探究的な学びを促進することができると考え、本研究を進めていくことにした。

2. 研究仮説

登場人物の人柄と心情の変化を読んだり、物語の構造を読んだりすることで、物語の面白さに気づき、進んで読書に親しむ子が育つであろう。

とした。

3. 研究内容・方法

3. 1. ごんの人柄を捉える

まず、ごんの人柄をとらえるためにごんの行動と気持ちのずれを明確にした表（図1）を活用し、ごんの行動と心情のずれを読んでいくことにした。この表は、ごんの行動を表している叙述を抜き出し、その下にごんの心情を書き込んでいくものである。そこで、行動と心情がずれていることに気付きやすくし、子どもたちの話し合いが活発に行われるようにした。

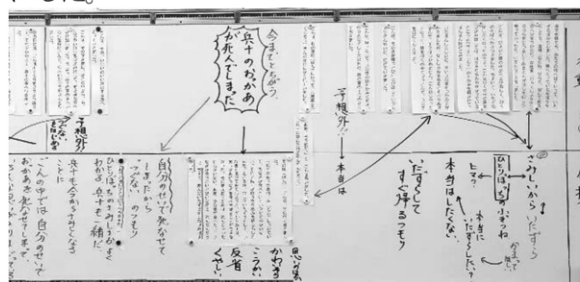


図1 ごんの行動と心情のずれを考察した板書

図1のように、子どもたちが行動と心情のずれを共有し、ごんの人柄を捉えることができた。その結果、心情曲線を書き始めたときも戸惑うことなくごんの心情を書き表すことができた。

3. 2. 心情曲線の活用

「ごんぎつね」の学習では心情曲線を活用するという手立てを用意した。心情曲線は、自然と自分と他者との読みのずれに気付き、話し合いを深めやすい特徴がある。その特徴を活かして、ごんと兵十の

心情の近づきを話し合うことにした。

心情曲線は、自分の読みと他者の読みとのずれに気付くだけでなく、自分の読みを振り返ることも活用できる。それは他者の読みを見て、「そうかな？」「自分は少し違ったな」という省察が働くため、本文に戻ってもう一度読みを深めることもできる。そうした特徴から本単元では心情曲線を活用していく。

3. 3. カリキュラム・デザイン

物語の面白さを実感させるために国語科においてこれまで身に付けた知識を活用しながら、『ごんぎつね』を学習する。

例えば、『白いぼうし』において学習した、登場人物の心情は人物の行動や会話から読み取ることができるという知識は『ごんぎつね』の学習において「ごんの心情を読み取る」場面でも活用することができる。

「白いぼうし」の学習において学習した、登場人物の心情は人物の行動や会話から読み取ることができるという知識が「ごんぎつね」の学習において「ごんの心情を読み取る」場面でも活用され、「ごんぎつね」の学習における**情報収集のプロセスを充実させる**。

登場人物の行動や会話、情景描写、作者の意図に注目しながら読み進める活動を通して、「物語には、作者の意図を反映した様々な工夫があること」を学習してきている。その経験を活かして「ごんぎつね」の学習では登場人物の会話や行動、情景描写を読み、作者の意図を考えることで、物語に施された作者の様々な工夫をとらえようとする**情報収集のプロセスを充実させる**。

(カリキュラム・デザインの資料より抜粋)

また『一つの花』において学習した、登場人物の心情は人物の行動や会話から読み取ることができるという知識は『ごんぎつね』の学習において「ごんの心情を読み取る」場面でも活用することができる。

「一つの花」の学習において学習した、登場人物の心情は人物の行動や会話から読み取ることができるという知識が「ごんぎつね」の学習において「ごんの心情を読み取る」場面でも活用され、「ごんぎつね」の学習における**情報収集のプロセスを充実させる**。

(カリキュラム・デザインの資料より抜粋)

そして「読むことについて考えよう」という単元では、本の見つけ方や読書に親しむ学習を行った。

その知識を「ごんぎつね」でも取り入れことにした。

「読むことについて考えよう」で学習した以下のことを活用した。

読むことについて考えようの学習において、自分の読みたい本は、ふだんの生活の中や読んだ本をもとに探したり、図書館で探したりすることができるという知識は、「ごんぎつね」の学習における新美南吉の作品を探したり児童文学作品を探したりして読む場面における**情報収集のプロセスを充実させる**。

(カリキュラム・デザインの資料より抜粋)

こうした知識を「ごんぎつね」の学習で活用することで、物語の面白さを実感し読書のつなげることができるといえる。そのために年間通してつけたい力を見通し、考えておく必要がある。

4. 授業の実際と考察

兵十の心情曲線(図1)を提示し子どもたちの意識を近づきに持って行き、問いを作り話し合いを深めようと考え、導入に心情曲線の拡大図を提示した。子どもたちは自分とのずれに気づき「ごんと兵十は分かり合えたのか」という問いを導くことができた。

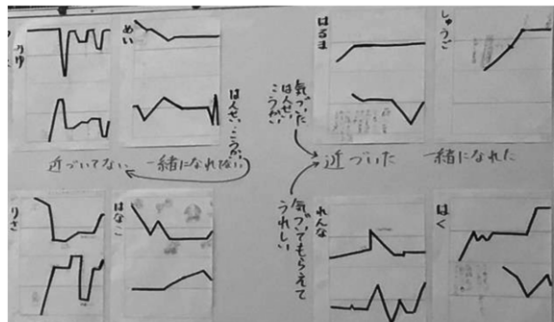


図2 心情曲線を提示したもの

(心情曲線の) 拡大コピー持ってきたからまずは見て。Sくん。

なんか気付いたこと出てきた？

Hくん, Rちゃん, Sくん

c: あがってる。おんなじ。

t; Mちゃん, Hちゃん, Mちゃん, Rちゃん。この4人は？ どう？ なにかきついた？

M: 右は近づいて、左は離れている

t: 自分の心情曲線と比べながら周りの心情曲線を見てみよう

t: わかりあえたのかな。どっちだと思いますか。

t: こっちは一緒になれたとおもう人、こっちは近づいてない人 これがいいと思う？

R: ちがう。

S:「お前だったのか」ってところが一緒になっている。驚きと嬉しさだと思う。
 S:違うと思う。つぐないに気づいていたと思う
 t:え、気付いてた?
 c:気付いてない。撃たれてから
 t:どこからきづいた?
 H:ごんが気付いたから
 t:Hくんは、くりをもっていったことを気付いてもらって嬉しかった。ほんまにそうですか?
 c:違う。
 S:それに気付いてもらったことが嬉しかったわけではない。

この発言の部分から問いを作り出し話し合いを作ろうとしていることがわかる。

しかし途中で話し合いが停滞してしまう場面があった。それは教師側が仕掛けとして用意していた「兵十はなぜばたりと火縄銃を取り落としたのか」という問いである。この発問をし子どもたちの読みを焦点化しようと試みたが、子どもたちの学ぶ意識は心情曲線の近づきであった。そのことは以下の授業記録からわかる。

t:なんで火縄銃をばたりと取り落とした?
 まさと:ごんはくりを置きに来たから悪くないのに撃ってしまったから
 c:ごんは悪くない
 t:悪くないっけ?
 S:プラスに賛成。
 気付いて悲しいけど、分かり合えたから近づいた。
 M:悲しいと思うから、なんか違うと思う。
 t:どっちやろな?
 S:ごんは嬉しくて兵十に近づいてる。
 兵十は悲しくて離れている。

4. 1単元の終末の変化

今回の単元計画では、三次での学習は、新美南吉の作品を読み、そこから児童文学作品へと広げていく計画であった。しかし学習を進めていく中で子どもたちから「ごんぎつね」の良さを広げたいという思いが出てきた。またその良さを広げるために「ごんぎつね」劇を行いたいという要望が出てきた。そこで、三次の学習計画を劇に変更することにした。

三次の学習を変更してもこの先に子どもたちの読書生活を豊かにできると考え、大きく修正することになった。

4. 2.「ごんぎつね」の劇

劇を進めていく中で大切になってくるものは、登場人物の心情を声で表すところである。もう一度、読み返すことで、叙述や挿絵に注目し、子どもたち

なりにごんぎつねの世界観を表現しようと取り組むことができた。

また劇はセリフを少し付け加えたり動きを想像して加えたりしながら子どもたちだけで考え、練習を重ねていった。

劇をすることで、読みが深くなるといえる。それは、劇の練習中に子どもたち自身で、「その行動はおかしいよ。ごんの気持ちとはちがうよ。」や「兵十の火縄銃の落とし方はちがうよ。それだと滑って落ちた三田に見える。」などといった発言が要所要所に見られた。これは、自分たちの読みと劇での行動とのずれを見つけ、修正しているといえる。

劇本番では、練習を重ねたことで、自分たちの読みを表現することができたといえる(図3, 4)。見ていた同学年の子どもたちからは、「ごんの表情がよかった。」「最後の場面を見ていて悲しくなった。」という感想もあり、一定評価を得ることができた。



図3 劇の様子



図4 劇の様子

4. 3. 授業の考察

授業のはじめに心情曲線を提示したことで、子どもたちは、自分の書いた心情曲線と違うことで、ずれに気づくことができた。そのずれに気づくことで、兵十とごんは分かり合えたのかという問いにつなげることができたと考えている。

また心情曲線を活用したことで子どもたちの読みのずれが起こり自然と問いが生まれた。その問いを追究していくことで話し合いを深めることがで

きた。

しかし途中で話し合いが停滞する場面が見られた。それは、読みを深める問いを子どもたちに共有することができずに話し合いの焦点がばらばらのままであったためである。

5. 成果と課題

本単元では、子どもたちに物語の面白さを実感させることで、読書生活を豊かにしたいという思いがあった。物語の面白さを実感できれば読書に向かう子が育つだろうと考えた。そこで、物語の面白さを実感できるような仕掛けとして、ごんと兵十の二人の心情曲線を活用しました。二人の登場人物の心情の近づきを考える本時を行った。

まず、授業の導入で、兵十の心情曲線が、ごんに近づいている心情曲線と近づいていない心情曲線を提示し、比べるところから始まった。比べることで子どもたちは、ずれを見つけ「ごんと兵十は分かり合えたのか」という問いを出した。子どもたちからは、「もやもやする」「ごんのつぐないが報われてよかった」「分かり合えたのに別れが来てしまっって切ない」といった発言が生まれた。

心情曲線を活用したことにより、子どもたちは、自分の意見と友達の意見のずれを見つけやすくなり、考えやすくなった。その結果思考を深めることができたと考えている。その結果として物語の面白さに近づけたのではないか。

また授業後にアンケートを取ったところ子どもたちは、物語の学習を通して本を読んでもみようと思った子どもは、25人になった。授業前では、18人であった。この結果を比べてみると、子ども自身が今回の学習で物語の面白さを実感することができたと感じていることだといえる。

しかし課題として、学習を深めるための手立てが不足していたことで、学級としての話し合いが深まりにくかったことが挙げられる。心情曲線は話し合いのきっかけになることはできたが、そこから深めるための手立てがなく、途中で停滞する場面が見られた。そのことから、発問が子どもたちの考えたいと思うものでなったといえる。今回「兵十はなぜばかりと火縄銃を取り落としたのか」という問いを投げかけたが子どもたちは心情曲線の近づきに向かっており、発問を投げかけるタイミングや話し合いの中で少しずつ修正していくべきであった。

そのことを踏まえて次の授業の改善と修正を行い子どもたちの学びへとつなげていきたいと思っている。

参考文献

文部科学省(2019)「学習指導要領解説 国語編」

水戸部 修治・吉田 裕久(2017)「小学校新学習指導要領の展開 国語編」, 明治図書

阿部 昇(2017)「国語力をつける 物語・小説の「読み」の授業」, 明治図書

中村和弘, 東京学芸大学附属小学校国語研究会(2018)「見方・考え方 国語編」, 東洋館出版社

小林 康宏(2019)「小学校国語「見方・考え方」が働く授業デザイン」, 東洋館出版社